中国新聞　　2007/4/21(土)

ひろしま歴史回廊

第9部・再考 厳島合戦①

土曜日に掲載します

軍記物と古文書　劇的勝利の虚実とは

今から約四百五十年前の弘治元（一五五五）年十月一日未明、毛利元就は安芸の厳島（宮島）で陶晴賢を打ち破った。この厳島合戦は、元就の生涯の中でもっとも華々しい場面である。日本合戦史上、織田信長の桶狭間の合戦とならんで、奇襲攻撃による劇的な勝利の典型とされている。

■こじつけ多い通説

通説によれば、元就は宮島におとりの城を築き、謀略によって陶をおびき寄せ、夜陰に乗じて奇襲攻撃を仕掛けて陶の大軍を壊滅させ、晴賢を自刃させたとされている。

しかし、厳島合戦に関する通説的な理解は、「陰徳太平記」など江戸時代に編さんされた軍記物に基づいている部分が少なくない。いうまでもなく軍記物は、後世の創作（フィクション）である。長州藩の歴史学者永田政純は、軍記物は、作者が人の耳目を喜ばせるために、足りない部分を勝手に補ったり、こじつけたりしたものであり、合戦の記述も十に五も証拠はないと批判している。

■証言で実像に迫る

永田は、史実は証拠となる古文書によって確定しなければならないとする立場を主張している。私たちも永田の方法に倣って、軍記物の記述には一切頼らず、確実な古文書によって合戦の実像を明らかにしなければならない。しかしながら、厳島合戦に関する古文書は必ずしも多く残されているわけではないし、古文書の記述は多くの場合、断片的である。

ただ幸いなことに、厳島合戦については、合戦のすべてを宮島の現地で目撃した当事者の証言が残されている。厳島神社の棚守房顕が、天正八（一五八〇）年に記した「房顕覚書」である。この覚書は合戦の二十五年後に記されたものだが、その内容は詳細かつ正確である。

新出史料を含む古文書と「房顕覚書」をあわせて読み解くことによって、厳島合戦の実像に迫ってみよう。

（秋山伸隆・県立広島大教授）

厳島合戦の陣形などを描いた芸州厳島御一戦之図（山口県文書館蔵）